



ぶどうのささやき

29号

2020年
1月15日発行

地域経済の活性化を目指し、社会貢献をしています。

過去を活かすか、捨て去るか

あけましておめでとうございます。

2010年11月に横須賀汐入の「市民活動サポートセンター」の館長として赴任した。最初は右も左もわからず紹介される市民団体の方々に毎日挨拶だけをしていた。横須賀は市民活動が盛んな町だ。様々な分野の市民団体が活躍している。横須賀に来る前から YMCA という公益法人に長く身を置いてきたので、市民団体とのお付き合いは長い。だが「産業クラスター」という名前は失礼ながら初めて聞いた。その立ち位置と活動内容を聞いて「なるほどな」と思った。

当時私も50才を過ぎて何となく定年後の人生を考えることがあった。まして周りには定年後の人生を謳歌している市民団体の諸先輩方があふれるほどにいらっしやる。自分の第二の人生を考えた時、仕事上のスキルを活かすボランティア活動ができればこんなにうれしいことはない、とぼんやり思った。

とはいえ、当時はまだまだ先の話とサポートセンターの仕事に邁進した。多くの事業にかかわった。地域の活性化は異なるステークホルダーが連携することに鍵があると、「企業 NPO 大学パートナーシップミーティング」を神奈川県と共催で行った。市民団体の力を強めるには市民団体同士が学びあうことが必要と考え「のたろんカレッジ」を始めた。仕事上のスキルを市民団体のお困りごと解決につなげる「プロボノ」など…。

ふと思った。「これってみんな産業クラスターさんがやってきたことだよな…」素晴らしい先達に敬意を表したい。

2014年から市と連携して「生涯現役フォーラム」を県立保健福祉大学で実施してきている。シニア向けの講演会、セミナー、展示会、ワークショップなどを集めた

横浜 YMCA
特定非営利活動法人
YMCA コミュニティサポート
事務局長
三浦市民交流センター 館長
高橋 亮



イベントだ。何年前か、講演者のおひとりから定年退職後の男性が地域や家庭に溶け込めず「定年鬱」「ひきこもり」になる現状を聞いた。原因の一つは「会社生活のルールを地域社会に持ち込もうとすること」そして受け入れられず疎外感、プライドが壊れていく。その解決には「一旦過去の自分と決別することが必要です」と講師は言った。確かにそれは必要かもしれない。でもなんとなく納得できない自分がある。過去と決別するよりは、過去を活かすことの方がより自然ではないだろうか。産業クラスターさんたちはその鏡である。

作春、私も60才となり定年を迎えた。社会の仕組みが変わり、定年後の再雇用制度で同じ法人に勤めている。ただ勤務地は変わった。横須賀市「市民活動サポートセンター」の館長から異動し、できたばかりの「三浦市民交流センター」に館長として赴任した。

あと数年で再雇用も終わり、おそらく本格的な定年を迎えて、皆さんの仲間入りをすることとなる。さて私に現役時代に培ったものを活かすことができるのだろうか？ でも待てよ、と最近思うことがある。

過去をいったん捨て去ること、これも実に魅力的に思えてきたのだ。仕事上のしがらみ、固定観念、趣味興味の分野、友人知人、いったん全部（家族関係を除いて）捨て去るリセット願望がむくむくと湧き出してきている。「六十にして耳順う」とはなかなかいかない。

クラスターとは・・・

クラスターとは、ぶどうの房や羊の群れを意味します。米国の経済学者マイケル・ポーターが著書『経済戦略』の中で異業種間のネットワークを構成している状況を意味するものとして『産業クラスター』という言葉を使っています。私たちは地域経済活性化への貢献を目指して、2003年8月に産業クラスター研究会を設立しました。



新年のご挨拶

令和新時代のご挨拶・・・創立16周年を迎えて

新春を迎えお慶びを申し上げます。

本年は干支の初め、子年の縁起の良い新年を迎えました。昨年... 令和新時代が始まりました。

昨年15周年を迎えた当会も、現状の支援体制を見直し、新時代に相応しい新体制を構築する準備に入ります。

さて、県下の中小企業をめぐる景況感... 高年齢化や人材不足など難しい課題もあります。

昨年は、収益3部門の業績はまずまずで、非収益部門も認定要件を満たす支援活動をいたしました。

活動実績ではHPの新規受注、経営指導、技術管理支援などあり、情報セキュリティセミナー開催、横須賀市立市民活動



理事長 木下 武

サポートセンターでの「なんでも相談室」(毎月第3水曜日)開催など「一般市民へのサービス」を着実に実施しています。

認定NPO法人として、活力・行動力あるシニア集団が地域社会のニーズに答え、「しぶとく」活動・成長・模索をするとともに、内部的にはクラスタークラブを充実させ、囲碁将棋・音楽・ゴルフ・ボーリング・飲み会などの催しを会員間で高めていきたいと存じます。

初子(はつね)の日に詠まれた和歌

松の上に鳴く鶯の声をこそ

初音の日とはいふへかりけれ 宮内『拾遺和歌集』

【皇太后藤原穏子(おんし)に仕えていた女房の宮内(くない)という者がまだ童女の頃、小松を根引きして長寿を祝う正月初子(はつね)の日に、醍醐天皇の御前で五葉松にとまっている鶯が鳴いたのを詠まれた和歌。

「松の上に鳴く鶯の声を初めて聞く日こそ、初音の日とはいふべきですね」との意。松は「待つ」の掛け言葉で、鶯の初音を待ちわびていることを示す。

清少納言は「鶯は九重(ここのえ、御所)では鳴かない」といつているが、それ以前にすでに鳴いていたという反例である。清少納言は何を意図したのであろうか。また、本和歌は『源氏物語』でも参考にされている。】

【歳時記】一意専心

大津漁港の裏手から走水の破崎(はさき)緑地までの海岸沿いを、ほぼ毎週走っています。この辺りは東京湾に行き交う貨物船や猿島を見渡すことができ、冬の晴れた日にくつきりと佇む富士山(写真の左地平線)にかすかに見える、や春の走水の絢爛な桜など、四季折々の景観にも恵まれています。

ランニングの時間は主に平日の夜で、自宅から往復10kmの道です。それ違うのは日課の散歩をこなす人や釣り人を入れても数えるほど。とくに馬堀海岸に沿った約1.6kmの直線「マボチョク」部分は歩行者用の街灯がなく車道側から届くオレンジ色の弱々しい光だけが頼りです。月明かりのない夜は近寄らないと人の顔も判別できないほどの暗がりを行います。

そんなとき、私の思考は日常を離れます。身体が温まり呼吸が一定してくると、自分の足音と息遣い、耳元で風を切る音、他は何も耳に入らずときおり額から流れて眼に沁みる汗を拭いながら、ただひたすら腕の反復運動を繰り返しては交互に運ぶ蹴り足の力加減に意識は集まり、堤防の端までの数分間、私の全身の組織器官にとってそれが唯一の関心事となります。

走り終えた頃にはたいてい、頭の中がスッキリと整理されていることに気づきます。日常を完全に遮断する時間を挟むことでどこから手を付ければいいのか踏み出しかねていたことが見えてきたり、つい込み入って考えがちな雑事がシンプルに思えてきたりするのは、絡まった糸がほどけると似た感覚かもしれません。

いよいよ今年も東京オリンピック開催の年。真夏のレース当日に選手たちがどんなドラマを見せてくれるのか今からワクワクしています。今回は代表の選考に一発勝負を採り入れる方法がランナーたちを驚かせ、さらに開催地の札幌への変更は関係者のみならず日本中をアッと驚かせました。稀に見る騒動を経て選手たちは本番を迎えることになりました。どうか最高のコンディションで臨んでほしいと思います。大切なこの時期を俗事に振り回されることなく競技の準備に集中できた、そんな選手が世界中に大きな感動を巻き起こすのではないかと期待しています。(幸)



地域の防災と減災に貢献

インタビューをもとに地域の防災と減災に貢献する (有) 小山防災を紹介します。(インタビューは 2019 年 12 月実施)

横須賀市坂本町で先代が会社を設立したのは昭和 47 年、創業 47 年目。偶然にも 47 という数字が並びます。

小山哲史社長は先代から「後は頼む」と言われ事業を引き継いだ 2 代目。従業員は 4 人。事務所を預かるのは従業員でもある奥さんの郁子さんと長年協力してもらい信頼も厚い女性事務員。社長をはじめ皆さんの電話対応はいつも気持ち良い。

事業内容

事業の内容は消防用設備の設計・施工・保守点検、消防設備の機器の販売、弱電設備の施工および管理業務です。中でも神奈川県東部を中心としたマンションの防災設備の保守点検が大きなウエイトを占めます。

マンションの設備点検・修理は定期点検、突発的な故障対応など、今は人材の確保も難しい中、社長自ら毎日飛び回っていますが長期契約の固定客を持っているのが強み。また、突発的な対応では地域の住民から台風などで誤動作した機器の修理依頼があると夜中でも飛んでいきます。

その他 私たちになじみが深い各種防災用品(各種消火器、火災警報器など)や備蓄品(アルファ化米など)の取り扱いもしており、横須賀では同業他社は 16 社。お客様の中には古い機器の修理希望があり、それに応えて対応したがやはり故障が起こったときが辛いとのことでした。

しかし、お客様第一を商いの基本として、軽いフットワークと丁寧な対応ということが営業の強みと拝見しました。

地域貢献

当然のことながら社長は各種専門資格を有し、仕事以外では高校野球の審判員資格を持ち、特に夏場は仕事の案件も比較的

有限会社 小山防災 代表取締役 小山 哲史

〒238-0043 神奈川県横須賀市坂本町 1 丁目 34
(電話) 046-824-1910
(FAX) 046-824-0282

少ないため休日は審判に出かけるという若者のスポーツ振興にも一役かっており、また 地域の防災訓練では指導的立場で毎年参加しています。



今のところ 3 代目をどうするか思案中ですが、失礼ながら中小企業の持つ共通の悩みでしょうか。

防災・減災拠点として

昨年も災害が多発した日本列島。多くの人々が尊い命をなくしました。地球の温暖化が気候変動を齎(もたら)していると言われて久しく、2000 年頃より日本は地震活動期に入ったと専門家は言っています。発生する地震や台風の自然の猛威は避けることはできません。ひとたび人の、私たちの生活圏で発生すれば災害となります。しかし災害となる前の備えはできます。今後、災害から命を守る防災と減災はソフト面、ハード面とも私たちが自然の猛威に対抗するうえでますます大切な手段となります。

その中で防災・減災の一翼を担う小山防災は私たちと共に生きる心強い地域の防災拠点ではないかと感じました。

(インタビューア：産官学連携支援部会 佐々木 興吉 記)

事務局からのお知らせ

(事務局 佐々木 興吉)

- ① 2019 年 8 月 3 日 横須賀市本町コミュニティセンターにおいて「夏のボラ市 2019」 イベントに参加し、個人会員 柳本氏による「親子の包丁研ぎ塾」を開催。実演と実習をまじえた「砥ぎ塾」は参加者から大好評であった。詳細は当会 Web サイトをご覧ください。
- ② 2019 年 10 月 10 日 産業交流プラザにて中小企業、市民活動団体、NPO 法人、一般個人向けに当会の十八番(おはこ)情報セキュリティセミナー 第 5 回目を開催。
- ③ 2019 年 10 月 20 日 「いきいきフェスタ金沢まつり」に出展参加。雨で順延されたにもかかわらず盛況でした。詳細は当会 Web サイトをご覧ください。
- ④ 2019 年 11 月 9 日 横浜市立西柴小学校で 5 年生 3 クラス 100 名に「エコ教育」を開催。当会の定番となり生徒、父兄、先生の皆さんに喜ばれています。
- ⑤ 2019 年 11 月 28 日 住友重機械工業 横須賀製造所の見学会を開催。多数が参加し、企業の皆さんと個人会員の研鑽の場となり実りある見学会でした。詳細は本誌トピックスと当会 Web サイトをご覧ください。
- ⑥ 2019 年 12 月 6 日 2019 年度第 4 回理事会を開催。2019 年度上期の活動実績の報告と 2019 年度下期活動予定の報告を行いました。その後 法人会員の従業員と会員をまじえて会員集会として恒例のボウリング大会と忘年会を盛大に行いました。
- ⑦ 2020 年 1 月 22 日(水) 産業交流プラザにおいて FM ブルー湘南 パーソナリティ・シンガーソングライター 灯織(ヒオリ)さんをお招きして新春講演会を開催します。会員の皆さんの参加をお待ちしています。
- ⑧ 2020 年 2 月は「神奈川県中小企業・小規模企業活性化推進月間」です。2 月 13 日(木) 三浦市民交流センター(三浦市引橋)にて地域の皆さま向けに講演会「見せよう地域の力」を開催しますので皆さまの参加をお待ちしています。
- ⑨ 新入会員の紹介 個人会員 伊澤 俊夫(平塚市)

歴史散歩

三崎漁港と城ヶ島大橋

三崎の歴史

城ヶ島が自然の防波堤として働き、三崎港は天然の良港として造られている。古くは「美佐来」又は「御崎」と呼ばれ、天平時代(710～784年)には城ヶ島に神宮寺が建立され、薬師如来が祀られていたといわれている。

平安時代になると、讒訴(ざんそ)により筑紫に左遷された藤原資盈(すけみつ)が、貞観6年(864)筑紫に赴く途中、暴風により三崎に漂着し、その後房総の海賊を平定した。さらに福祉に努めたことから地元民に尊敬され、海南神社の祭神として祀られている。室町時代の応永10年(1403)には明の船が漂着したことから、逐次に明との交易がおこなわれるようになった。

入江の一部には北条湾の名が残されているが、その由来は、室町時代の永正13年(1516)に三浦氏を滅ぼした小田原城主北条氏により注力され、港としての重要性がますます増したことになるものと思われる。江戸時代の正保年間(1645～1648年)には、紀伊半島からの漁民の移住もあり、江戸の発展に伴い魚介類の需要も高まった。寛永年間(1624～1645年)には、船改めの番所も設けられ、風待ち港として回船の寄港地となり賑わったが、三崎港の一貫した役割はあくまでも漁業であった。そして磯付き漁業に始まり、沖合釣りを経て遠洋漁業へと移行した。戦後は太平洋・インド洋・大西洋まで進出して塩釜・銚子・焼津・下関などと肩を並べ大遠洋漁業の港となった。

しかし、城ヶ島を防波堤とした天然の良港も平地が少ないため、関連施設の拡大が難しいことや、岸壁が手狭なため、係船が思うようにならず、三崎漁港の将来に不安を投げかけるようになってきた。



三崎漁港から城ヶ島大橋を望む

城ヶ島大橋の建設と思い

三崎漁港の発展には城ヶ島北側を埋立て、土地を求めざるを得ない状況になり、16haほどを埋め立て東洋一の遠洋漁業の拠点を造る計画が浮上してきた。

当時農相の河野一郎は現地を訪れ、三崎漁港の発展は城ヶ島の埋め立てと、半島を結ぶ架橋以外ないとして地元の説得に努

個人会員 加藤 幹雄

めた。県知事の内山岩太郎も地元の発展に異存はなく、「米国余剰農産物見返り資金」の融資を受けて、三崎漁港最大の事業である城ヶ島大橋建設の起工式が、昭和32年4月17日に行われスタートした。

三崎漁港には千トン級の漁船が出入りするものとして、航路幅を70m、桁下余裕高は満潮位上21mが必要で、これをもとに向ヶ崎の台地から城ヶ島・遊ヶ崎台地までの575mの架橋となった。

橋の形態をコンクリートにするか鋼構造にするかで議論が交わされた。航路部三径間は戦後西ドイツで研究開発された、船殻構造や航空機の張殻構造の薄肉断面を橋桁に応用した鋼床板箱桁橋にして、陸との接続部分はPCコンクリート桁にすることになった。

橋脚については、地盤が第三紀層の凝灰岩の露出部分は直接固定できたが、海中部分は断層破碎帯が横切っているため、凝灰岩に届く基礎が必要とされ、空気ケーソン工法によりコンクリート製の箱が、海面下18mまで沈められた。

橋は一般的に車が走るとたわみ振動を起こして不快感を感じるが、城ヶ島大橋はその点も固有振動周期を検討して揺れを非常にゆったりとするように設計して、人体にあまり感じないものになっている。

2年後の昭和35年4月16日河野農相と病気の内山知事に代り、津田副知事がテープカットをして城ヶ島大橋は開通した。

その後、内山知事が現地を訪れて選んだ橋げたの「赤」は今も受け継がられて鮮やかに輝いている。また全国的に近代橋を赤く塗るようになったのは、城ヶ島大橋からであった。「見返り資金」返還後も有料として渡橋料を徴収して、鮮やかな赤い色を周期的に塗り替えて華やかさを保っている。

橋からの眺めは、東に東京湾を行き来する船を見ながら房総半島を望み、西に相模湾から遙か箱根、富士山まで望むことができる。橋の下には白い航跡を描きながら港に出入する漁船の姿を見ることができる。何時までもこの秀麗な眺めを楽しめることを望んでやまない。



城ヶ島大橋と白秋碑



～ Web サイトの改善編～

会報誌 25 号以来、連載している「Web サイトの自主運営の手引き」の続きです。参考にしてください。

Web サイト改善の目的

Web サイト改善の目的にはいろいろなものがあると思われませんが、究極的には売上高やイベント等の集客率の向上のどちらかまたは両方に寄与することではないかと考えます。

Web サイト改善：インバウンドマーケティングの視点

Web サイトの改善はいろいろな視点から改善する方法がありますが、前述の改善の目的に沿った 1 つの方法である、インバウンドマーケティング (IM) という最新のマーケティング手法の視点からアプローチする方法について紹介します。

- (1) IM は、①既存の売り込み型マーケティング (アウトバウンドマーケティング) の限界が見えてきたのに伴い、それを補完するものとして近年になって考案されたマーケティングの概念・手法です。②人々の情報探索行動が Web サイト主体になってきていることと、③ Web サイトの検索エンジンがコンテンツ重視の SEO (Search Engine Optimization, 検索最適化) 評価をするように変化してきていること、が背景にあります。
- (2) IM は、潜在顧客の情報探索活動を通じて、自社または団体の Web サイトに人々を引き寄せ、購買やイベント参加に繋げていくとともに、顧客の定着化や他者推奨へとつなげていくマーケティングです。
- (3) 購買やイベント参加の意思のある潜在顧客を Web サイト訪問者→見込み顧客 (有用な資料が見つかり資料取得をした訪問者) →顧客 (購買またはイベント参加申し込みをした見込み顧客) →固定顧客 (定着した顧客) / 他者推奨者 (他者を推奨して拡販支援をしてくれる顧客) へと段階的に引き上げていくために、その時々適切で価値があり、一貫性のあるコンテンツを提供することが主体になります。

改善の方法

潜在顧客が自社または団体の Web サイトを訪問してコンテンツの探索活動を続け、購買やイベントの参加に結び付くことを期待しているので、そういうパスを期待動線と呼ぶことにします。しかし、実際には期待通りには進まな

いもので、期待動線の途中で離脱してしまいます。潜在顧客が実際に探索活動で動いたパスを実動線と呼びます。

ところで、期待動線と実動線との差異は何故生じるのでしょうか。その原因は潜在顧客の探索活動に支障が生じたからです。すなわち、その時々提供されたコンテンツが適切で価値があり、一貫性のあるものではなく、期待に沿わないか、あるいは信頼性を損なってしまうことにあります。

改善の方法は、①実動線計測・解析・修正の計画を立てる。②実動線を計測する。③推移したポイントと離脱したポイント (離脱点) を明らかにする。そして、離脱点から該当するコンテンツの修正場所を突き止める。④コンテンツを適切で価値があり一貫性のあるものに修正する。その後、再計測を行う。

このように、PDCA を回してコンテンツを改善し実動線を期待動線に近づけていきます。

自主運営を実施するために

この改善活動は、かなり専門的な知識が要求されます。基本的には、専門家と共同で推進することが望ましい。

しかし、その中でどういう期待動線が考えられるのか、すなわち、それぞれの時点においてどのような選択肢があり、どのようなパスが存在するののかの素材提供は Web サイトの運営サイドが行わないと現実的かつ具体的なコンテンツにならない。当会の法人会員の中に、ここに注力されて Web サイトをマーケティングに有効活用されている会社があります。

また、その素材をベースにして離脱点を追求することにより、次のような利点が生じます。

- ①実動線の計測をせずに離脱点を想定して PDCA を回す方法が考えられます。いわゆるシミュレーションです。この方法は計測時間と準備時間を省けるとともに、より体系的・総合的に改善を進めやすいという特徴があります。
- ②また、この方法を通じて、IM の在り方を習得できるのではないかと思います。IM はコンテンツが生命線を握っておりますが、それは蓄積ができ、その改善努力によってよりよい、より喜ばれる IM へと変貌させていくことができます。これこそが IM の重要な点です。

今回はヒューマンマシンインターフェイスの設計ガイドンスについて考えます。

トピックス

住友重機械工業株式会社横須賀製造所見学会

当会では、定期的に神奈川県内の事業所や機関の見学会を実施し、法人会員と訪問先の交流や個人会員の研鑽の場を提供していますが、今回は地元横須賀にある住友重機械工業(株)横須賀製造所を11月28日に見学しました。横須賀製造所は1971年に追浜造船所として開設され、現在は造船部門の他、ジェットエンジンのタービンプレード、メカトロニクス機器などハイエンド製品の製造部門と同社技術開発の中核となる技術研究所を擁しています。

見学会は当初9月の予定が、台風15号でドック内が冠水するなどの被害により中止されていたものを、現在は復旧が進み住友重機械殿のご厚意で年内開催となりました。

当日生憎の冷たい雨の中、法人6名、個人会員17名、合計23名が追浜駅からお迎えの同社マイクロバスに乗り込み、見学会がスタートしました。

横須賀製造所・小平所長の御挨拶及び会社・製造所の説明の後、今回は造船部門の住友重機械マリンエンジニアリング(株)と精密鍛造品製造部門の住重フォージング(株)を見学しました。同社造船部門は浦賀にあった明治30年創業の浦賀船渠の伝統を受け継ぐ造船所です。鋼板の受入ヤード、中小組立工場、大組立工場、ドック、艀装岸壁と工程順にバスで巡回し、組立工場で最大6百トンに組立てられたブロックを運ぶ大型トレーラや、横須賀市内各所からも遠望できる3百トン吊りゴライアスクレーン2基に圧倒されます。深さ10mのドックの底までトンネルを通過してバスで降り、シリーズで建造されている11万トンタン



カー2隻を船底から眺める様子は壮観でした。同社は11万トンカーに特化することで中国・韓国との厳しい競争に処しているとのことでした。

続いて、産業用・航空用精密鍛造品の製造工場を見学。造船のトン・メートルからグラム・ミクロンの世界になります。こちらも旧中島飛行機の流れをくむ老舗で、航空機関連鍛造品において、特に特殊合金を使用するジェットエンジン用鍛造ブレードでは国内唯一のメーカーとのことでした。数千トンの大型プレスでチタン合金・ニッケル合金をタービンプレードの形にする鍛冶場のような熱間鍛造工程。整然と機械の並ぶ機械加工工程、そして林立する3次元計測器を使って完成したブレードを全数検査するクリーンルームの検査工程と、工程ごとに大きく環境が変わるコントラストが印象的でした。

見学後の質疑応答では、安全から3Dプリンターまで幅広い質問が出て、熱のこもった質疑となりました。

(海外関連事業部会 仲田 清)

羅針盤

時代は平成から令和へ、多くの話題と出来事があった。「新天皇御即位礼」、「吉野彰氏のノーベル化学賞受賞」、「ワールドラグビーの盛況」、「小惑星探査機・はやぶサ2号の成功」、「相次ぐ台風と水の災害」、「(故)中村哲氏のアフガニスタンでの偉大な実績」などなどである。

▼今世紀最大の発明・開発ともいわれている「ノーベル賞受賞の吉野彰氏のリチウムイオン電池」を取り上げたい。パソコンやスマホやOA機器の小型化と長時間使用の実現、世界的な電気自動車(EV)の実用化・普及は、驚異的に性能向上(小型、軽量、高性能、安全性、他電池の5~7倍)した電池の開発による。▼電気はクリーンで便利な2次エネルギーとして世界中で使われているが、その発電は70%が化石燃料(石炭、石油、天然ガス)。運輸分野(自動車、飛行機、船舶)で化石燃料の38%位(世界)が使われている。このままでは二酸化炭素(CO2)は減らない。▼これからは、自然エネルギー発電と自動車の電動化(EV)の加速化(20年後50~70%)が必致とされる。大電力の貯蔵も自然エネルギー発電は蓄電が大きな技術課題であったが解決される。「リチウムイオン電池」は、地球温暖化対策とエネルギーセキュリティー確保の強力な羅針盤となるであろう。日本の経済力復活の原動力にも期待したい。(昭)

発行：特定非営利活動法人 産業クラスター研究会

〒239-0847 横須賀市光の丘8番3号 YRPベンチャー棟209号

Tel & Fax : 046-847-6355 E-mail : yrp-cluster@marble.ocn.ne.jp

横浜事務所 〒236-0055 横浜市金沢区片吹69番26号

連絡先 : 046-847-6355 E-mail : yrp-cluster@marble.ocn.ne.jp

発行人：木下 武